

2018年度日本オセアニア学会関東地区研究例会（第1回）の報告

——NZより Te Aroha Rountree 氏を迎えて——

深山直子（首都大学東京）

2018年度第1回関東地区研究例会が、2018年11月25日（日）にお茶の水女子大学にて開催された。今回は特別スピーカーとして、ニュージーランドより Trinity Methodist Theological College の専任講師、Te Aroha Rountree 氏を迎え、ディスカッションはお茶の水女子大学の棚橋訓会員が務めた。なお、企画と当日の司会は筆者が担当した。

Rountree 氏は、オークランドで生まれ育った40代初頭の先住民マオリ女性で、北島北部を領域とする部族集団の一員である。マオリ・スタディーズを専門とする研究者としてのみならず、オークランドおよび北島北部のマオリ・コミュニティ、そしてキリスト教のNZメソジスト教会（The Methodist Church of New Zealand / *Te Haahi Weteriana o Aotearoa*）における若きリーダーとして、近年の活躍が目覚ましい。

例会で Rountree 氏は、「メソジスト教会における女性のマナ：ニュージーランド・メソジスト教会の権威ある地位に座すマオリ女性たち（*Mana Wahine i te Haahi Weteriana: Māori Women in Positions of Authority in the Methodist Church of NZ*）」という題名のもとで、まず、マオリとキリスト教メソジスト派の関係史を概観し、マオリがあくまで自文化に基づいてキリスト教を「鋳直して（mold）」きたことを強調した。その上で、現在のNZメソジスト教会は、マオリ信徒コミュニティ（*Te Taha Māori*）とそれ以外の信徒コミュニティ（*Tauīwi*）に分かれており、二者はガバナンスと構造において、対等かつ協力関係であることが目指されている点で、他宗派とは一線を画していると指摘した。次に、19世紀から現代までに活躍したマオリ女性リーダーたちを具体的に挙げながら、彼女たちがマオリの権利獲得や地位向上に果たした役割を紹介した。その中では、政治・社会・宗教的に周辺化さ



Te Aroha Rountree 氏（撮影：深山直子）

れがちな女性たちが、キリスト教という信仰や教会内での権威を活用しながら、しばしば宗派を超えて人びとを動かして、女性参政権の獲得、マオリの土地の堅持や返還要求、あるいはマオリ文化の復興などといった目的を達成してきたことが明らかにされた。

ディスカッサントの棚橋会員は、自らが研究対象とするクック諸島との同異点に言及した上で、マオリ女性リーダーたちには、結果的に政治・社会・宗教的リーダーシップの重層が共通してみられることを確認し、彼女たちのマルチポジションリティを指摘した。さらに、キリスト教の教会や制度が、彼女たちにとって社会変革に向けたアドボカシーのアリーナになってきたと強調した。参加者数は10人程度であったが、その年代や関心の幅が広がったこともあって、その後も多様な意見交換がなされ、場所を移した懇親会も大いに盛り上がった。

筆者は、マオリ社会・文化を捉える上で、キリスト教の位置付けを考えることが不可避とは知りつつも、それを焦点化して研究をしてこなかった。今回の例会の実施を通じて、そのことを改めて反省すると同時に、近代・現代における先住民の多様な運動がしばしばキリスト教の教会や制度を不可欠としている点にも気付かされた。

Rountree氏はまだ若い、そのマナ (*mana*) を認められて、年々メソジスト教会を超えて活躍の場を拡げており、歴代のマオリ女性リーダーに名を連ねつつある。筆者のさらなる研究の展開として、彼女がキリスト教徒そしてマオリ女性として、これまでどのように歩んできて、これからどのように歩んでいくのかを、注視することから始めたい。



研究例会の様子（撮影：深山直子）